

Ocuac News

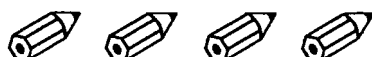
市大山岳会ニュース no.27 1999.6.15

Osaka City University Alpine Club News Osaka City University Alpine Club News Osaka City University Alpine Club News Osaka City University

南極半島クルーズに行ってきました

『南極クルーズ』は友人宅で見た南極半島のスライドが忘れられなくて、何時か行ってみたいと温め続けていた夢の1つだった。山の仲間からは「何？それ」と馬鹿にされそうだが……

36年卒 長谷川ふみ子



ただ一つ自信があった体力にも最近かげりが見え始め、世界中行きたいところが山ほどある中から、先ず体力を必要とするところから優先順位をつけて、時間切れにならない内に出来るだけ沢山行ってみたいと考えていた。それで最近インド、中国、エジプト、モロッコ等行って来たが、やはり南極はひと味違ったものだった。

マリン・エクスペディションズが企画したツアーで、2月5日出発、2月18日帰国の2週間の旅。南極での実働は3日間。（南極は12月から1月が夏で、2月は秋。3月から10月は冬期で船で南極半島に近づくことは不可能。）

デンマーク船籍（乗客90名位）、乗組員：北欧人、ツアースタッフ：アメリカ人、コック：フィリピン人、乗客：日本人の構成で、クルーズは南米アルゼンチンの最南端ウスワイアから始まる。日本を出て成田→ニューヨークが飛行機で12時間、トランジットで6時間待ち、ニューヨーク→ブエノスアイレスが10時間。

長旅の疲れをとる目的もありブエノスアイレスで一日観光。夜は本場アルゼンチンタンゴの夕べを満喫。翌日早朝ブエノスアイレス→ウスワイア（南米最南端）

まで飛行機で6時間、夕方乗船するまで町を散策。目的の船に乗るまでに、実に3日半もかかったことになる。

いよいよ乗船。荒れることで有名なドレーク海峡を2日半で南極半島近くに到着予定が、往きの瞬間最大傾斜が47.8度（普通大きくて38度位）で3日かかり、乗客の半数以上がひどい船酔いで、船内で予定されていた南極に関するレクチャーも出席者が少なかった模様。私も立つことも食べることも出来ず、ベッドから落ちないように必死でしがみついていた。トイレに行こうとしてドアなどにぶつかって全身青あざの上、頭部を何針か縫ってもらう人もいて、どうしてこんな船に乗ったのかと恨めしい思いだった。

ところが南極半島に着いてみるとすばらしい世界で、船酔いのことなんかどこかに吹っ飛んでしまった。先ず、海の色が信じられない碧色。どうしてこんな色なのか。水がきれいだけでは説明出来ない何かがありそうな神秘的な色。我々以外船影も人影も一切ない。本船に寝泊まりして、南極半島や周辺の島々にゾディアックボート（溪流下りのゴムボートと似ているが強力なエンジン付）で次々と上陸する。膝までの長靴にオーバーズボン、上はスキーと同じくらいの服装。海が穏やかで好天の、条件の良い時しか上

陸しない（出来ない）ので上陸中は暖かすぎる位だが、すぐ近くに氷が浮かんでいる所をゾディアックが凄いスピードで走るので、風と水しぶきが刺すように冷たく、救命胴衣を着けていても海に落ちたら助からないかもと、全員必死の思い。

南極の自然を守るために南極旅行条約でいろいろなことが決められている。上陸時には動物に近づきすぎない。ペンギンには5m以上、アザラシには15m以上近づかない。彼らの繁殖や子育てなど生活を脅かさない距離を保



ゾディアックで上陸

つ。鳥の巣や苔などを踏まないように細心の注意を払って歩く。どんな小さなゴミも捨ててはいけない、拾ってもいけない。食べ物飲み物は一切持ち込まない。トイレもだめ。いかなる所にも“落書き”などしてはいけない等。

出会った動物は産卵、ふ化が終わったアデリーペンギン、ジェンツーペンギン、ヒゲペンギンなどの親子とその集団（12月に行った友達はペンギン達がルッカリーで卵を抱いているところを撮ってきた）、大きな図体で大儀そうに寝そべるゾウアザラシなどで、彼らは人間を恐れることなく、まるで仲間だとも思っているように自然に振る舞い、我々は彼らの生活空間にお邪魔していると言ったこれまで経験したことのない動物とのふれあい方は実に爽快だった。

南極観測基地を訪問して内部を見学したり、日本人の訪問は珍しいと基地にあるお菓子（主に乾燥果実）を全部出しての大歓迎を受けたりした。

デセプション島は元南極最大の捕鯨基地で、もう使用されなくなった大きい鯨油用のタンクや鯨の処理工場の跡が残っていた。南極を自然のままに、美しくのスローガンから言えば撤去してもらいたいが、膨大な費用がかかるということなのか、歴史的事実として保存しておこうとの考えなのか、質問するのを忘れた。

又ここには活火山があり、氷河の上に火山灰が降りつもって一部灰色になっていたり、島の波打ち際の砂

が地熱で温められ素足では火傷するほど熱く、小さい波がくると丁度良い入浴温度になるが、氷山からの大きい波がくると冷たくて震え上がってしまうというスリリングな南極随一の温泉があり、何事も経験と入ってみた。勿論更衣室はなく、外の温度はスキー場並み。濡れた水着の上に服を着込んでゾディアックで船に帰るのだがその寒かったこと。1時間も放置されれば凍死しそう。

ルメール海峡を渡るときは透き通るような碧色の氷山にびっしり囲まれ、その神秘的な世界に引き込まれ甲板にいた人は全員声無し。シャッターの音だけと云う感動的な時間を経験したのだが、同じ頃、機関室では船の全砕氷力を出し切ってやっと通過できたと胸をなで下ろしていたそうだ。氷山に閉じこめられると動けなくなって遭難するし、もう少し後ではルメール海峡に入ることさえ出来なかったと言う。自然の大きい力を感じ、我々の運の強さに感謝した。

上陸した所はデセプション島その他、エレファント島、クーパービル島、キングジョージ島等と南極半島のバラダイスベイやニッコーハーバー等。

帰りの船は行き以上に揺れ、瞬間最高傾斜50度と言う想像を絶する揺れ（新記録）の中、夕食時にマグカップでサーブされたスープが空を飛び、女医さんが食事中椅子ごと倒れ、後ろのテーブルに頭を強く打って頸椎損傷、事務室ではコンピューターが落下しマネージャーが足の骨を折るなど怪我人続出。

私は「行きの失敗は繰り返さない」と決心。上手に薬を飲み、山岳部で鍛えられた根性で、体の角度をしっかりと取りバランスよくトコトコと歩く技術を習得して快適な(?) 船旅にした。船内のフランス料理も、食後のデザートもお酒もしっかり味わい、レクチャーもバードウォッチング、ホエールウォッチングも楽しんだ。

怪我人続出の後にはなるべく早く患者を病院に運ぶために最短距離を猛スピードでとばして2日余りで帰港。バトカーの出迎えを受けた。

2週間の日程で実際に南極を楽しめたのはたった3日。一寸効率が悪い感じが、船の中では毎日「南極探検の歴史」「南極条約と南極の将来」「南極の科学

と地理学」「南極の鯨」「海鳥」「極寒地でのダイビング」等興味深いレクチャーが、それぞれの専門家によってスライドを交えて行われ、充実したプログラムだったと思う。それにしても夢のような3日間のために片道28時間の飛行機と3日間も船に揺られたのだから、余程物好きな集団だということになる。

南極点踏破記事などで大きく報じられる南極大陸と、私が行った南極半島との差があまりに大きいのに驚いたりがっかりしていちゃることだろう。私自身ももう少し厳しいものを期待していたが、南緯も遙かに異なるし、夏秋の観光シーズンに観光客として訪れたのだから仕方あるまい。それなりに大きい発見もし、エンジョイした。

藤本さんから南極の山に関心があるとのリクエストがあったので送ってもらった資料や、船のスタッフの話をまとめてみる。

イギリスのアドベンチャー・ネットワーク・インターナショナル(ANI) がチリの南端プンタ・アレーナスから南極のVINSON MASSIF(4897 m) (78 35 S, 85 25 W)のベースキャンプまでスキー付きの飛行機を飛ばしている。(1時間20分) 真夏の12月~1月がベストシーズンで、ベースキャンプから最低2日~2週間で頂上をアタックしてベースキャンプに。平均10日。山そのものは難しくないが、厳しい寒さと標高から14,000フィート以上の山の経験、アイゼン、ピッケル等の高度な使用技術が要求される。グループまたは個人でどんな登山をしたいかANIのスタッフとよく話し合ってからプランを立てる。医療、助言、調査、地図、天気予報、食事、ガイド、シェルパー、貸し装備等登山者の必要に応じて提供する。費用はチリのプンタ・アレーナスから南極往復と契約内容によって決まる。日本からチリまでの往復と、氷上飛行場(南極点近く)の条件によってはチリで出発を待つことが多く、その間の滞在費(物価は安い)は自己負担。

Vinson Massif以外の可能性

1. Dronning Maud Land
(72 30 S, 12 E on the edge of the Indian Ocean)
1500mから3148mの山々。岩がよく、雪が少なく、24時間明るい。
2. Transantarctic Mountains
南極の東から西へ2000マイルも続き、100以上の未踏の山々。

もっと詳しい情報はANI 27 London End,
Beaconsfield, Bucks. HP9 2HN UK.

又は、Marine Expeditions

東京区中央区日本橋兜町11-8 第3共同ビル5 F
(Tel 03-5623-3586)

E-mail : khanaoka@bd.mbn.or.jpの花岡さん迄。

ペルーアンデス ブランカ山群への旅 (1999.4.28-5.9)

目指したのはピスコ峰 (5,730m)

S40年卒 佐々木惣四郎

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

1) ブランカ山群の主峰はワスカラン(6,768m)

アンデスの中心はブランカ群であり、南緯9度西経77度に位置する。アジアのインドネシアチモール及びアメリカワシントンとほぼ同緯度、同経度である。

つまり、熱帯に属するが、3,000m以上の高さに位置

するため、高山気候帯となる。ペルー国内での位置は下図の如く、リマの北部にあたり、インカ古代都市で有名な南部クスコとは反対の位置となる。

2) 登山のベストシーズンは6-7月

アメリカン航空にてダラス経由リマ空港に到着したのは、20時間の空の旅を経て28日23:30であった。乗継時間が2時間あったのであるが、ダラスへの到着遅れで20時間ぶっ通しの旅立ちとなった。

翌29日は登山基地ワラス(3,070m)へ8時間のバスの旅。つまり、海岸の砂漠地帯にある海拔0mから3,100mのワラスまで3,100mを登る。ちなみにバス代金はUS\$12.-であった。

ブランカ山群の雨期は明け切っておらず、ホテルは閑散としたもので、ホテルから山が見えたのは帰る日の5月5,6日の朝のみ。ただし十分にエキゾチックで味のある楽しい旅であった。ワラスのホテルからの風景は、十分に登山基地に価するものであり、5月6日の帰る日のアーベントロート(朝焼け)に輝くワスカラン峰は圧巻であった。

3) 順化登山パストローリ(5,240m)へ

4月30日ガイドと共に車3Hで4,400m迄登り、雪の斜面をコンテで登った。周囲の景色は、6,000m弱とはいえ、なかなかオツで素晴らしい。残念ながら、雪がやんだすぐ後で、周囲の景色はガスの中にほとんど消えており、時々見ただけであったが、雪景色は迫力がある。高度の影響は余りなかったが、日本の春山同様雪が腐っており、少しモグルだけで心臓に負担を感じた。頭痛がなかったというだけである。

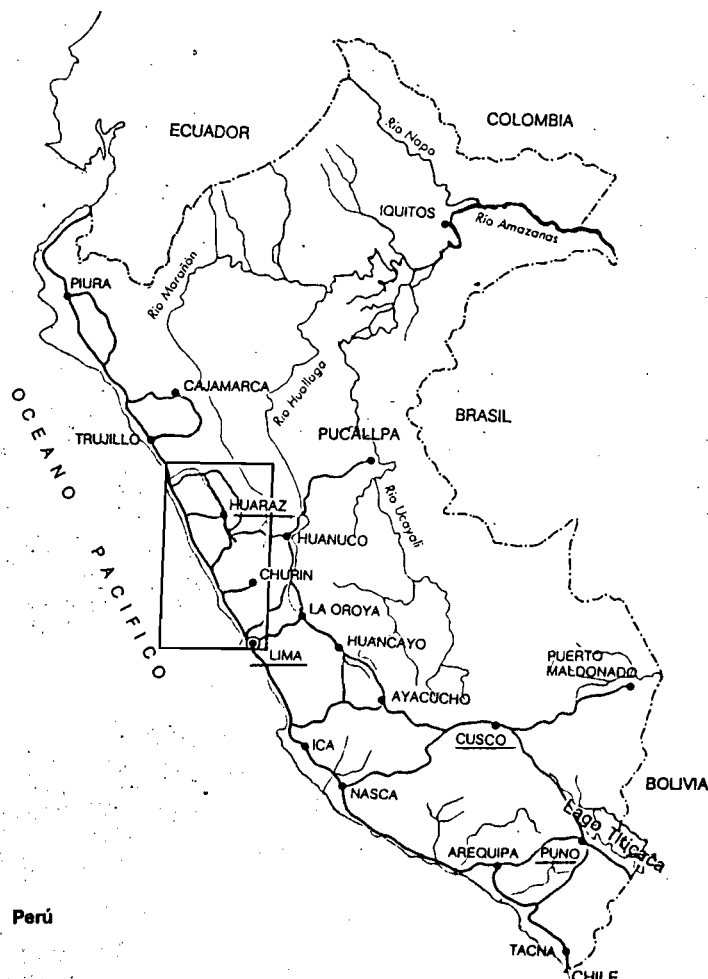
出発前の情報で、雨期明けが遅れており6,000m以上は積雪多く、諦めるよう言われていたが、この雪では余程工夫しないとスムーズに登れないと感じた。

ホテルに戻って夜になると頭痛がしてきて、食欲もなく眠れなかった。この頭痛は高度によるものか、時差14Hによるものか解らなかった。お粥を作って無理に食べた。

4) ピスコ峰(5,730m)

ベースキャンプに向け出発

翌5月1日ガイド、コック、ポーターと主にワラスよりユンガイに行き、ヤングヌコ渓谷を抜けた場所の登山口(3,700m)に12時頃着い



白馬岳主稜登山

1999.4.23-4.26

平均年齢53歳9名の登山記録

兵頭 渉

メンバー： 藤本（64）、小笹（62）、上堂（61）、苑樹（59）、上田（58）、
藤村（55）、大島（52）、兵頭（51）、若林（20）の9名。年齢順。

4月23日（金）

兵頭車、京都太秦にて苑樹先輩と合流。22時50分、松竹京都映画撮影所内駐車場出発、一路ヒュッテ雪線を目指す。深夜2時過ぎにヒュッテ雪線到着。小笹車（小笹、上堂、大島）の歓迎を受ける。3時過ぎに藤本車（藤本、上田、若林）、藤村車（藤村）到着し明朝の予定打ち合わせ後就寝。

4月24日（土）

8時過ぎに全員起き出してき、大鍋でラーメンを作り朝食。6人用、5人用、3人用テント各1張り、ザイル40m×3本、スノーバー3本、スノースコップ1を持っていく事とし、10時前にヒュッテ雪線出発。

大町の国道沿いのスーパーにて食料調達。白馬駅前で昼食を取り県道終点二股に13時半到着。車は二股まで。猿倉までの林道が開放されるのは5月1日からとのこと。駐車場には5台程駐車しているだけで連休前の静けさか。

猿倉までは除雪された舗装道路を、お役所仕事、ことなかれ主義を呪いつつ小雨のばらつく中を進む。猿倉山荘から完全な雪道、うっすらとのこるトレースに今日の入山者は我々だけかなどと思う。

途中、白馬尻とガスの切れた主稜下部を望み明朝の取り付け場所を皆でワイワイいっつ確認する。16時半白馬尻のテントサイト着。夕食、寝酒を済ませ明朝3時半起き、5時出発を約し、20時前後に各テント就寝。

4月25日（日）

3人1組、3組がトップを交代しながら登ることとし、霧雨の中5時過ぎにテントサイトを後にする。主稜末端から見上げると、眼前に広がる雪面にはあちこちに亀裂が入り直登しにくそうなので、雪面右寄りを直上し、大きな雪のクラック下部に沿って左上へ。クラックを越えた所にできた雪棚で1ピッチ目の休憩。八方尾根兎平のスキーロッジ、岩岳のスキー場などガスが晴れて見渡せる。ただ主稜上部は未だガスに包まれている。

八峰への登り始め3人パーティが下降してきた。訪ねると昨夜八峰でテント泊、天気が悪く思わしくない為下降するとの事。八峰直下の台地では中年のパーティーがテント撤収作業中。同じく天気悪く下降するとの事。昨日来ここより上部へ登ったパーティーはいない様だ。頂上直下の雪庇は残っているだろうか？

急な雪面を100m程登り、八峰から伸びた稜線にでる。小さな氷柱を足掛かりに小さなピナクルを越えると、ブッシュと雪とザラザラした露出地面の混在したリッジ。その後の急雪面の取り付きは雪がグサグサで、氷化した踏み跡にゆっくりと足を乗せて体重を持ち上げる。登り切った地点でサブエッセン。気温の上昇や降り続く霧雨で腐った雪が、ちょっとした切っ掛けで小さな雪崩となり、白馬沢、大雪溪めがけて落ちてゆく。ドン、シャー、ザーと耳に届く音は近くの雪が崩れたかとい瞬緊張する。休憩中に後続の3人（学生）が、挨拶を交わしてトップ交代する。

見事に両側に切れ落ちた細いスノーリッジを慎重に進む。曲がりくねった稜線を、アップダウンを繰り返しながら進むと、六峰への急な雪面にたどり着く。ザイルを出し上田さんトップで登り、そのままフィックスして全員六峰集合。付近はテントが張れるくらいの平地が2カ所あり、小休止する。忘れかけたブルジョアや確保術の現場講習会？に花が咲く。先行3人組にはどんなパーティーに映ったか。

稜線上には露出灌木は無くなり、雪だけで構成されたリッジをトレース沿いに進む。流れるガスで先が見えず現在位置が確認できない。今日中に登り切れるだろうか？エスケープルートに使えるような沢筋、雪洞の掘れそうな雪棚を探しながら進む。しばらくして先行パーティーとトップ交代。時々ガスが切れて白馬大池方面、国境稜線が見えだす。気温は上昇を続けており主稜から大雪溪、白馬沢へ向けて小さな雪崩が絶え間なく落ちている。小さなコブをいくつか超え進むうちに 突然日が射し、仰ぐと主峰、頂上直下雪壁、2峰が見える。意外と近い。

今日の雪庇破りは我がパーティで。足取りも軽くなり、2峰の登りも雪壁を直登。ザイルフィックスし、全員頂上直下雪壁に集合。雪庇は発達しておらず、ルートは目前の露岩下部を右に5mトラバースし、あとは真っ直ぐ約60mと計算。トップは若林君。ピレイは上田さん。右だ左だと先輩諸氏の話に耳を傾けるトップに、自分で判断して登るよう指示。30m付近でスノーバーを打ち込みランニングピレイ。下から見ると雪の状態が悪そうな為、兵頭が途中でピレイすべくスノーバー地点まで登りピレイする。60度を超える傾斜の雪面の先に若林君の姿がかくれ、まもなく登行完了のコールが届く。次々とメンバーが頂上に着く。皆嬉しそうだ。ラスト小笹さんがザイル回収しながら登ってくる。

コール届きにくく、雪壁の端まで寄って小笹さんと若林くんのコール中継。ザイルアップー>アップー、チョイダウン>チョイダウン、・・・

「皆さーんもう少し静かに、コールがきこえな〜い」等怒鳴りながら、9人目登頂。バンザイ、おめでとう。テントを出てから約11時間。霧雨も止み、薄日の射す山頂でワイン、オレンジ、紅茶で全員登頂と上田さんの58歳誕生日を祝う。

下りは大雪渓を下る。左右の沢からの雪崩も日が陰ってから落ちてこず、膝まで潜るグサグサの雪渓を各自のペースで進む。白馬尻テントサイトで休むまもなくテント撤収し、暗闇広がる雪道を雪明かりを頼りに猿倉へと急ぐ。19時過ぎ猿倉着。白馬から大町へ向かう道路沿いのファミレスで夕食。改めて全員の無事と、計画完遂を祝う。24時ヒュッテ雪線着。

4月26日（月）

先に帰阪する、藤村、上田、若林、3氏を送って残りメンバーで山荘のメンテ、薪割り、駐車場隅の問題の切り株除去などの作業に汗を流す。

現役若林君の山行記より

4月25日

朝飯のうどんをかつこみ外へ。雪はいい感じにクラストしており、アイゼン、ゼルプストなど全て装備して出発。そこここに巨大な雪のクラックが走り回る斜面を登る。稜線上へ出る最後の登りが雪が少ないため非常に嫌な感じになっていたがノーザイルで無事に切り切る。そこから先は高度感のものすごいナイフリッジが続く。非常に爽快な気分である。ひとつピークを過ぎるとまた新しいピークが顔を出し、アップダウンがなかなか激しい。やはり雪が少なめのせいか嫌な感じのする登りが数か所現れる。ロープをフィックスしたりそのまま登ったりリーダーの兵頭さんの指示に従い進む。突然薄曇りの空から太陽の光が届き顔じゅうが灼けた。主稜の醍醐味である最後の雪壁の登りのトップをやらせてもらう。スノーバー2本をぶら下げて雪壁の下部にある岩を右から巻きまっすぐ登る。蹴れば締まり、階段の作りやすい雪の状態非常に登りやすい。最後の雪庇を乗っこすと目の前に頂上の銅盤があった。頂上で私の歩荷してきた大量のオレンジを食い、ワインをいただく。

小雪渓をシリセードで下り、大雪渓を駆け降りる。途中でモンベルの2リットルのハイパロンスタッフバッグとシャルレのピッケルを拾い自分の物にする。テント場につき撤収の準備。やがて日が落ちヘドランをつけての行動となる。猿倉についた時点ですでに真っ暗だった。そこからの林道歩きは長く、しんどかった。（若林健治）

市大山岳会行事報告

◆バードウォッチング

3月14日 金剛山

メンバー 山辻、上堂、大島、上田夫妻、藤本夫妻、
西田夫人、稲垣（会友）、宗実（会友）

◆ダイヤモンドトレール

3月27日 雨のち曇り

メンバー 上堂、上田、大島、兵頭、藤本
水越峠登山口(9:15)―葛城神社(10:45)―府の休憩
所(11:05-11:45)―久留野峠(12:10)―中葛城山
(12:20)―千早峠(12:50)―行者杉(13:30)―杉尾峠
(13:50)―山の神(15:10)―紀見峠駅(15:35)

◆「春の中央アルプス縦走」

コース： ヒュッテ雪線～空木岳～桧尾岳～千畳敷

期 間： 4月30日(金)～5月3日(月)

メンバー： 藤本(34経)、久保田(36経)、上田(40経)、西村(47経)、なつみ(妻)

<1日目> 4月30日(金) 晴れ後曇り

ヒュッテ雪線(5:55)～(12:20)迷尾根～(16:30)空木平避難小屋(TS1) 40mザイルFIX 4回

<2日目> 5月1日(土) 快晴

TS1(7:05)～(8:20)空木駒峰ヒュッテ～(8:50)空木岳～(13:45)木曾殿山荘(TS2)

40mザイルFIX 10回

<3日目> 5月2日(日) 快晴

TS2(5:10)～(5:55)東川岳～(8:30)熊沢岳～(11:10)桧尾岳～(11:45)避難小屋(TS3)

40mザイルFIX 2回

<4日目> 5月3日(月) 曇り

TS3(4:50)～(5:00)桧尾岳～(6:30)濁沢大峰～(8:20)島田娘～(8:55)千畳敷～(11:10)ヒュッテ雪線

今回の山行計画は大阪に戻ってから初めてのことであり、初めての中央アルプス、初めての雪山ということで大いに楽しみにしておりました。いよいよ入山、天気もよく、空木岳を目指して登り始めました。時折、樹の間に見える南アルプスが美しく輝いていました。思いの外、残雪が多く、登山道も険しかった。初めてのアイゼンで足は重し、雪は深し。稜線に出ても、避難小屋まではまだ遠い。やっとの思いで着いた小屋はまるで冷凍庫。寒さと疲れで眠れぬ一晩でした。手を出せば届きそうな美しい月と冷たい風が大自然の中にいることを実感させてくれました。

二日目の空木岳頂上の眺望は素晴らしい一言です。好天に恵まれ、360度の大パノラマ。今回の山行に来て、ここまで頑張った良かったと思わず喜びを噛みしめました。喜びもつかの間、厳しさが待ち受けていました。空木岳頂上からの下山には緊張しました。下を見下ろしたときの谷の深さ、岩稜の凄さにびっくり。落ちれば必ず死ぬだろうと思いましたが、不思議と

◆ボート祭

参加者：上堂、大島、岡本、小笹、上田、佐々木、
東野、兵頭、福山、八木

5/23(日) 第108回ボート祭が行われました。

山岳会は今年は1艇の参加。残念ながら、1回戦敗退でした。その後の懇親会には、児玉学長が見えられ楽しく歓談しました。しかし、この日1番のハイライトは、自動車の免許を取られた岡本さんがマイカーに乗って来られたことでした。その岡本カーの前で記念写真を取り、解散しました。

5月の最終日曜ということで今年は、5/30と私は思っていたのですが、どうやら第4日曜ということで開催されているようです。連絡が遅く、不備がありましたこととお詫びします。(八木記)

恐怖感はありません。FIXザイルに守られたら着実に一步一步足を運ぶことばかり考えていました。振り替えば、この時が山行中のハイライトだったのでしょうか。後半の二日はアイゼンにも慣れ、体調も良く、少し余裕を持ち、少し緊張しながらアルプスの雪山縦走を楽しめたと思います。

今回の山行でより厳しい自然のなかにおかれた時こそ、生きているという実感が湧いてくるという山男の気持ちを少しは理解できたようです。厳しく、苦しい登山ほどその達成感、充実感は何物にも変えがたく、人を虜にするのでしょうか。得がたい雪山体験が出来たのも山岳会の先輩あってのことと思いますが、今私は大きな満足感に浸っています。しかし、雪山は今回で十分です。今後は雪のない、夏山、秋山を通して、大自然の素晴らしさを体験したいと考えております。

今回、同行していただいた皆様、温かいお心配りを戴き、有り難うございました。厚く御礼申し上げます。

(西村なつみ記)

山岳会総会が開催されました

1999年3月20日（土）於大阪弥生会館

3連休の初日にあつたためか例年より少ない29名の参加でしたが、次のような報告がされました。詳細についてはお手元の総会資料をご覧ください。

- ・平成10年度活動報告
- ・東京支部活動報告
- ・現役活動報告
- ・OB個人活動報告
- ・会計報告
- ・会計監査報告
- ・平成11年度活動計画
- ・駒ヶ根山荘運営委員会報告（運営状況/行事計画/会計報告）
- ・講演 会員武部秀夫氏
「1998ニンチンカンサ、メラピーク登山報告」

出席者 大橋、池永、廣谷、大倉、橋本、川勝、高木、荻野、清原、藤本、浅部、小笹、久保田、東野、苑樹、佐々木、上田、藤木、島川、奥田、大島、兵頭、西村、福山、武部、小倉、尾形、若林（現役）、大堀（賛助会員）

平成11年度活動計画 以降のものを紹介します。詳細は各責任者まで。

- ④6月 新緑の中央アルプス散策・沢登り（山荘利用）（責任者：久保田、田中）
是非とも推薦したい時期です。
- ⑤6月前半 富士山（責任者：佐々木）
7月前半 アルプス目指し高度順化トレーニングを
- ⑥8月5日（休）～15日（日） ヨーロッパアルプス合宿（責任者：佐々木、小笹）
シャモニ、ツェルマット、グリンデルワルドをベースキャンプに！
散策も可能！
- ⑦9月中旬 北アルプス・南アルプスの旅（山荘利用）（責任者：福山）
（参考 上高地まで2h、戸台まで1h）
- ⑧10月9日（出）～11日（月） 馬場島～剣岳 永田君を偲んで（責任者：廣瀬、澤田）
- ⑨11月後半 第6回バードウォッチング（責任者：上堂、島川）
- ⑩12月29日（休）～1月3日（月） スキー及び冬山登山（山荘利用）（責任者：苑樹、大島）
冬の上高地・西穂西稜

* *総会出欠はがきより抜粋* *

池田春次 喜寿（77才）になりましたが、まだ元気で毎週山歩きを続けています。

白井順三（代筆） 父順三は昨年夏、肺ガンのため亡くなりました。お世話になり有り難うございました。

信濃義彦 毎回出席できず申し訳ありません。95才の老母の介護に手をとられ、時間がとれません。

北濃祥二 4月に第2の職場を退職します。これからは丹沢の山々を楽しみたいと思っています。

中井博 4月より福井工業大学に勤務する予定です。

近藤哲也 昨年の秋、転勤で大阪に帰ってきました。

山辻英也 めったにない連休ですので北海道ヘスキーに行きます。十勝岳の下、白金温泉です。

伴 明 3月は山スキーのシーズンゆえ目下トレーニングで忙しい週末を送っています。

吉田均 この一年で定年退職します。又ゆっくりと山歩きできればと思います。

橋本九二男 新人合宿の思い出を投稿したところ、雑誌「旅」2月号に載せてもらえました。昨夏スイスの山々を思う存分見ることができました。

岡野幸蔵 皆さん、現役・若い者以上に挑戦的で羨ましい限りです。山に行きたいという願望大いにあります。でも佐々木並みにはいきませんネ。

宮崎多一郎 西村君より引き継ぎ、東京支部の会計を担当します。よろしくお願いします。

鷲見浩司 静岡で地学の講演を聞きに行きます。卒論や大学院の選択の参考にするつもりです。

林孝治 昨秋はブモリ（7,161m）に登頂できましたが、正月の剣岳（丸山中央山稜から）は敗退しました。

重廣恒夫 今年は1都1道2府43県の山を48週、土日を使って登る予定です。「ふるさと名山探訪」。

住吉仙也 3月17日よりネパールへ行きます。

高所速攻登山と高所順応について

メラピーク登山より

武部秀夫

昨年11月我々メラピーク同人は、クンプ山群の南端にあるヒンクー谷の源流、メラヒマールの主峰メラピーク(6,473m)に登山しました。幸い登頂することができましたが、今回の登山には一つのテーマがありました。それはこの山をベースから2日間で登頂し、戻ってくるということです。なぜこのテーマなのかといいますと、メンバー2人共この登山の3ヶ月前に、チベットのニンチンカンサ(7,206m)に遠征していました。1人は登頂、もう1人は6,400mまで登りました。一応高所順応ができていたということで、6,500mクラスの山へ速攻登山が可能か。3ヶ月前に獲得した順化が活かせるのか、という我々なりの答えを求めにメラピークに向かいました。(登山の記録は総会時の資料を参照下さい。)



ふつうメラピーク登山を実施するにあたり、アプローチは2,800mのルクラから4,600mのチェトラ峠へ一挙に1,800mの標高差を稼ぎ、いったん4,380mのチュリカルカへ下降するにしろ、5,000mのベースキャンプまでほぼ4,500mの高度を3日間行動することになる。そのため高所順応の対処として多くの登山隊は、エベレスト街道でゆっくりと5,000mの順化をしたあとメラピークへのアプローチに入る。またベースキャンプ以降は、メラ・ラにC1、さらに5,800m付近にC2を設け、荷揚げを兼ねて6,000m台の順化をし、いったんベースで休養して3日かけて登頂、下降する。よってエベレスト街道での順化に5日間、ベースキャンプへ6日間、登山に8日間、帰路キャラバンに4日間、都合23日間、予備日を加えればルクラ出発帰着ではほぼ1ヶ月かかる。

我々は3ヶ月前にチベットのニンチンカンサ(7,206m)へ登山しており、武部は登頂、川上は第2キャンプ6,400mまでと6,000m台の順応ができていた。メラピークベース入りの前日タグナック(4,356m)の裏山を700m登下降し、5,000mの順化を慎重にするも、ルクラから5日でベースへ入り、1日休養の後5,800mのハイキャンプで1泊、翌日登頂しベースまで下山。つまり2日間で5,000mのベースから6,473mのピークまで1,400mの標高差を登下降し、翌日から帰路に4日間の計13日間の速攻遠征だった。

しかしながら実際にはメンバー間で順応差があった。武部はおおむね問題なかったが、川上にとっては厳しかったようだ。特に5,800mのハイキャンプでアタック当日の朝は食欲がなく水分以外はとっていない。登頂後ハイキャンプ地点に下降するも嘔吐3回。ベースに下降した後も、また翌日4,300mに下降しても食欲なし。その翌日に回復といった具合だった。幸い全行程むくみ、頭痛はなく、体温、呼吸、脈拍は正常だった。武部と川上の差異は、夏のニンチンカンサ登山での獲得高度の差異によるものではないかと考える。前の登山で武部は6,400mのC2に2泊し、最高獲得高度は7,206m。川上は5,800mのC1に10泊したがC2には宿泊せず、C2へは2回荷揚げで登っている。最高獲得高度は6,400m。6,400mでの順応が、そこで宿泊したか否かの差異に起因していると考えられる。

今回幸い事故はなかったが、5,800mの順化を1日かけてしておけば、川上も好調に登攀できたと思う。ネパール側隊員は、サーダーは毎年6,000m7,000m峰登山隊に参加していること、またコックは9月にサイバル登山隊に参加、10月にアイランドピーク(6,160m)に登頂しているので全く速攻登山に問題はなかった。

p.s.7月～8月にHAJ隊でチベット、チョムカンリ(7,048m)へ行きます。

<会員消息>

昭和11年高商 平野義明氏 平成11年5月11日逝去されました。

昭和17年学部 白井順三氏 平成10年夏 逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り致します。

市大山岳会ニュース
大阪市立大学山岳会発行
会長：池永薫爾
編集：矢倉睦